

ファッションにおけるジェンダーレス化への着眼を通して ファッションと性差に関する調査

2000年卒業論文要旨

影井 良次

最近になって男性のファッションが目立つようになってきた。また同時に、男性のファッション雑誌や、男性向けの化粧品・身だしなみ用品などもみられるようになった。現代の特に若い世代の男性が、ファッションに気を使い始めた。今までファッションに気を使うのは女性であったのだが、最近になって男性がファッションに気を使い始めたのはなぜだろうか。

現代のとくに若い世代の男性は、ファッションに気を使っているが、けして女性的なファッションをしているわけではない。彼らは男性とわかるファッションをしている。現代の男性が女性に近づいているのは、ファッション自体が女性的になっているのではなく、「ファッションに気を使う価値観」が女性に近づいているのである。ファッションは、他者の視線にさらされているものである。したがってファッションに気を使うのは、「他者に見られる」意識、あるいは「見せる」意識が働いているのではないだろうか。今まで女性は「見られる」性として「見せる」工夫をし、男性は「見る」性の立場に立っていた。この図式が変わろうとしているのはなぜだろうか。

この問題について、「ジェンダー」・「ジェンダーレス化」と、「視線」（「みせかけ」・「まなざし」）の概念を使い考察していくことがこの論文の目的である。

第1章では、青年世代が育ってきた現代文化の特質から、現代の青年がファッションに気にするようになった背景を考察する。現代文化の都市的側面、情報化の側面、核家族化による人間関係の変容が、青年世代の環境を変化させた。環境の変化による青年のコミュニケーションの変化・価値観の変化から、青年のみせかけを気にする特質を考察していく。

第2章では、ファッションの社会性・ジェンダー性を通して、現代のファッションにおける資本主義的な商品性と、それに伴って現れている「流行」の権力構造、そしてファッションのジェンダー的特徴を論じる。そして、現代の青年がどのようにファッションに気を使っているのかを考察する。

第3章では、2000年11月に行なった「ファッションと性差に関する調査」と、2000年12月に行なわれた「浜松市民の家族生活に関する調査」の関連する部分とを通して、現代の青年が実際にどのようにファッションに気を使っているのかを分析し、原因を第1章・第2章を踏まえて考察する。